

古代日本語のアクセントに関する一報告：金田一法則の例外について

内山, 弘
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/11943>

出版情報：語文研究. 65, pp.1-16, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



古代日本語のアクセントに関する一報告

— 金田一法則の例外について —

内 山 弘

はじめに

所謂金田一法則（高起・低起）に関する式保存の法則が、古代日本語のアクセントの上に見られる特徴的な存在のひとつであることは詳述を要すまい。今その内容を、提唱者である金田一春彦氏の論考から直接引用させて頂くと、次の如くである。

《ある語が高く始まるならば、その派生語・複合語も高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派生語・複合語もすべて低く始まる》

ところでこの法則は、従来語義なり語源なりの研究に大きく寄与してきたが、それは、法則自体の内容の自然さもさることながら、その例外の少なさによるところが大きかったように思われる。しかるに、これまで金田一法則の例外について多少なりとも言及した論考は、筆者の管見に入っただけでも、次の如く九種に及んでいる。

① 桜井茂治氏「古代日本語の語構成とアクセント——接頭語十体言・形容詞十体言について——」（『国学院雑誌』64、S 38・8—9）

② 同氏「日本語の母音交替とアクセント——原始日本語アクセントの推定——」（『国学院雑誌』72、S 46・1、後「古代国語アクセント史論考」（桜楓社）に所収）

③ 望月郁子氏「第一音節の音調一致の法則に対する一つの疑い——語幹去声の形容詞の場合を中心に——」（『国語学』90、S 47・9）

④ 金田一春彦氏「去声点ではじまる語彙について——本誌第90集所載の望月郁子氏の論文を読んで——」（『国語学』93、S 48・7）
⑤ 柏原卓氏「語源研究法に関する一考察——アクセントから語源研究へ——」（『語文研究』39—40、S 50・6）

⑥ 小松英雄氏「アクセントの変遷」（『岩波講座日本語5・音韻』S 52・8 岩波書店）

⑦ 田中みどり氏「偶然と自発」（『仏教大学研究紀要』63、S 54・3）

⑧ 蜂矢真郷氏「一音節被覆形——露出形のアクセント——」（『金田一法則』の例外について——）（『万葉』順、S 56・6）

⑨ 山口佳紀氏「語源とアクセント——いわゆる金田一法則の例外をめぐって——」（『松村明教授古稀記念国語研究論集』S 61・10 明治

とりわけ最新の山口氏^⑨(以下、先行論文をこのように表記する)は、この問題に真正面から取り組んだ研究として、特に注目されるものであるが、その中で氏は、これまで知られている以上に多くの例外的事実を指摘し、その原因についていろいろ考察した上で、次の如き結論を出されている。

今後、金田一法則を語源研究に役立てようとする場合、相当慎重な態度が要求されるであろう。

個々の事例についての見解には多少問題の残るものも見えるとは言え、おおむねは従うべきものように思う。金田一法則の例外問題は、ここに至って遂に、法則の根幹をもゆるがすまてになつたという訳である。

このように、我々は今や金田一法則の効力に対して、多少の留保を与えざるを得なくなつてきているのであるが、続いては、果たしてどの程度の留保を与える必要があるのか、ここに明らかにされなければならぬであろう。とは言え、実際問題としてそれは容易なことではないけれども、その前提として、例外的事実の十分な収集と検討が不可欠であることは確かかなところであろう。しかるに、それを先述の諸論考でまかなえるかという点、ちょっとそういうこととは言えそうにない。最も詳細な山口氏^⑨にしても、慎重を期して資料と用例とをそれぞれ絞り込まれたためであろうとは思ふが、筆者の見る限りでは、相当数の指摘もれが見受けられるのである。金田一法則を今後より有効に利用するためにも、例外的事実の更なる指摘と検討は必要であると思われる。

そこで、本稿ではまずその手始めとして、筆者の調査の及んだ平

安く鎌倉期の種々のアクセント資料をもとに、そこにあらわれた金田一法則の例外(とおぼしきもの)について、複合語・派生語ごとにその状況を報告しようと思う。従来の研究は限られた数種の資料の範囲内でなされたものが多い故、そこに示された例外の原因についての解釈の中には、多くの資料から見れば多少不審なものもないではない。その点本稿はその欠をも補うことが出来るであろう。ともあれ、金田一法則の例外の原因については、まだまだ未解決の部分が多く、今後に期待される面も大きい。本稿は、そうした研究に資料面でいささかの寄与をなし得れば、という思いで執筆したものである。

一、資料について

本稿で主として使用した古代日本語のアクセント資料、及びその準拠本は以下の如くである。へゝ内に記したものは本稿で用いる略称である。

①『日本書紀』声点本^⑩ 左記の諸本による。^{注4}

岩崎本(岩)：『秘籍大観日本書紀』(大阪毎日新聞社)／前

田本(前)：同上^{注4}／圖書寮本(図)：同上／北野本(北I・

II・IV)：貴重図書複製会版／鴨脚本(鴨)：古典保存会

版／弘安本(弘)：『国宝下都兼方自筆日本書紀神代卷』(法

蔵館)／乾元本(乾)：『古代史籍集』(天理図書館善本叢書I

八木書店)／兼右本(右)：『日本書紀兼右本I』『同II』

『同III』(天理図書館善本叢書54・56)

②『類聚名義抄』諸本^⑪ 左記の諸本による。

図書寮本〔図〕：『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社）／観智院本〔観〕：『類聚名義抄観智院本仏』『同法』『同僧』（大理想書館善本叢書32、34）／高山寺本〔高〕：『和名類聚抄』／三寶類字集（同上）／鎮国守国神社本〔鎮〕：鎮国守国神社蔵本三寶類聚名義抄（未刊国文資料別巻一 未刊国文資料刊行会）

③『前田本・色葉字類抄』〔色〕 中田祝夫・峯岸明高氏編『色葉字類抄研究並びに索引本文索引篇』（風間書房）による。

④『法華経单字』〔法〕 貴重図書影本刊行会版による。

⑤『和名類聚抄』声点本〔和〕 馬淵和夫氏編『和名類聚抄古写本声点本文および索引』（風間書房）による。諸本の略称は同書に準ずるが、一部改変（伊廿↓廿伊、伊十↓十伊）した。

⑥『西本願寺本・万葉集』〔万〕 竹柏会版による。

⑦『古今和歌集』声点本〔古〕 秋永一枝氏『古今和歌集声点本の研究・資料篇』『同・索引篇』による。諸本の略称は同書に準ずる。

⑧『御巫本・日本書紀私記』〔私〕 古典保存会版による。右のうち、①～⑧は平安・院政期、⑨～⑪は鎌倉期のアクセント

資料である。金田一氏が法則の適用範囲を平安期に限っておられる以上、ここでも従来の如く平安・院政期の資料のみを使用すべきかとも思われるが、例の中世におけるアクセント体系の変化（低平型の消滅）が生じるまでは、去声の場合を除き、鎌倉期においても金田一法則はなお有効であったと考えられるし、資料的にも①～⑧を補い得る故、今回改めて鎌倉期の資料をも取り上げてみたのである。とは言え、実際に⑨～⑪を使用するにあたっては、南北朝以降

の新しいアクセントが混入している可能性を考慮するなどして、慎重にも慎重を期さなければならないことは勿論である。よって本稿では、①～⑧を中心に⑨～⑪を参照するという形をとることにした。

なお、本稿の如き研究において、望月郁子氏編『類聚名義抄四種声点付和訓集成』（笠間書院）の存在が極めて有益であったことを付言しておく。

二、複合語

はじめに複合語における金田一法則の例外を取り上げる。

金田一法則の例外をなす複合語は、その語構成から次の六つに分類される。

①名詞＋（助詞＋）名詞、②形容詞語幹＋名詞、③語根・形容詞語幹を除く体言（名詞性の低いもの）＋（助詞＋）名詞、④疊語、

⑤動詞＋動詞、⑥体言＋形容詞。

この他にも、「居体言＋名詞」の構成の語が若干ある。すなわち、カレイヒ〔乾飯〕とホカヒビト〔祝人〕であるが、これらについては、むしろ派生としてとらえた方が良さそうである故、次節派生語の方へ送った（カル〔乾〕↓〔三―〕④、ホカフ〔祝〕↓〔三―〕③）F(5)。

以下それぞれについて見ていくが、⑥・⑦については用例が少ない（それぞれ一例ずつしかない）故、「その他」としてまとめて取り扱うことにする。

〔二―〕 名詞＋（助詞＋）名詞

(1) ケ〔毛〕ーケモノ〔獸〕

毛ケ（毛）②観僧上51ウ、畜介多毛乃（毛）③前710オー獸ケモノ（毛）④

⑤観仏下本67オ、獸介毛乃（毛）⑥前710オ・廿伊十八34オ

(2) セ〔背〕ーセナカ〔背中〕、ソー〔背一〕

背セ（毛）②観仏中63ウ、踞セクマル（毛）③図16―晦セナカ（毛）④

シ、（毛）⑤⑥観仏中65オ、倍ソムク（毛）⑦高4オ

右の二例については、蜂矢氏⑧に指摘がある。

(3) コ〔此〕、コレ〔此〕ーココ〔此処〕

之コ（毛）②コレ（毛）③観法下22ウ、許能（毛）④神功語33右一言去、（毛）

⑤⑥図70、虚々珥（毛）⑦仁徳語43前

(4) ソ〔其〕、ソレ〔其〕ーソコ〔其処〕

憶在ソノカミ（毛）②図74、彼ソレ（毛）③高22オー某ソコ（毛）④観仏

下本43オ、曾虚珥（毛）⑤仁徳語43前・北IV・右

右の二例については、金田一氏④・山口氏⑨に指摘がある。

(5) ウカ〔稲魂〕ーウケモチ〔保食神〕〔神名〕

倉稲魂宇介能鹿鹿（毛）②神代上注弘、稲魂宇能鹿鹿（毛）③神

武注北IV・右ー保食神宇能鹿鹿（毛）④神代上注弘・乾、保

食神宇介能乃加美（毛）⑤前15ウ

cf. 保食神ウケモチノカミ（毛）⑥観法下2オ、保食ウケモチ（毛）⑦

⑧神代上訓弘・乾（毛）⑨乾

(6) クキ〔茎〕ーククノチ〔木神〕〔神名〕

莖クキ（毛）②観僧上11オ、莖久岐（毛）③京178ウ、莖久々太知（毛）④

⑤京四15オー句句迺馳（毛）⑥神代上文弘・乾

(7) カハ〔川〕ーカハシリ〔河後〕〔地名〕

河置波（毛）②図6ー河後加波利（毛）③高六10オ

(8) タケ〔竹〕ータカムナ〔筍〕

竹タケ（毛）②観僧上32オ、筍タカハラ（毛）③タカムラ（毛）④鎮III

ウー笋タカムナ（毛）⑤観僧上32オ、筍太加牟奈（毛）⑥5ウ

これについては、山口氏⑨に指摘がある。

(9) ササラ〔細紋〕ーサザラー〔細一〕、サザレイシ〔細石〕

娑佐羅（毛）②継体語97前・図ー佐瑳羅餓多（毛）③允恭語66

右、泊相佐々良奈美（毛）④図25、硯碱、サ、レイシ（毛）⑤図156

cf. 佐瑳羅餓多（毛）⑥允恭語66

(10) マヂ〔貧〕、マツシ〔貧〕ーマヂチ〔貧鉤〕

貧窮末知（毛）③31オ、妻マン（毛）④観法下29ウー貧鉤マヂチ（毛）⑤

⑥神代下訓弘・乾

一音節語とその複合語・派生語の中には、その平声点を東声点の誤写として処理することによって、見せかけのアクセント不台を打破することが可能な場合も少なくないが、(1)〜(4)の四例に関しては、誤点の可能性は考え難い。やはり蜂矢真郷氏の如く、一音節語ということに何らかの意味を持たせるしかなさそうである。尤も、それが蜂矢氏⑧に説かれているような事情かどうかは、なお考うべき余地がある。 (5)〜(7)の三例は、固有名詞化に伴うアクセント変化と見なされるが、(8)〜(10)については、その理由は明らかでない。

〔二一〕 形容詞語幹十名詞

(1) アカシ〔赤・明〕、アク〔明〕ーアカヒユ〔赤克〕

緹綬阿加之（毛）②図26、晨アケヌ（毛）③高93ウー赤克阿加比由（毛）④

⑤京六60ウ・十伊六39オ

cf. 赤克アカヒユ（毛）⑥観僧上23ウ

(2) アサシ〔浅〕ーアサー〔浅一〕

を認め得る故、アクセント不台の原因をそこに求めることも、あながち許されぬことではあるまい。(7) (9) に関しては適当な説明が見出だせないが、或いは前記形容詞語幹の場合に準じて考えられようか。

〔二一四〕 疊語

(1) カロシ〔軽〕—カログロシ〔軽]

軽カロシ(上上) ②観僧中44ウ、侮カロム(上上) ④高19ウ—易カロク(上上) 平○○○ ④高95ウ、軽カロ(上上) ②観僧中44ウ

(2) キヤ〔ウヤ〕〔礼〕—キヤキヤシ〔ウヤウヤシ〕〔恭]

敬ウヤ(上上) ②観僧中31ウ、礼キヤ(上上) ②神代下訓乾—謙ヤキ(上上) 平平專 ④図92、恭ウヤ(上上) ②観僧上5ウ

右の二例については、柏原氏⑤・山口氏⑨に指摘がある。

(3) ナガシ〔長〕、ナグ〔投〕—ナガナガシ〔永]

阻脩(上上)、リナカシ(上上) ②図28、抛ナク(上上) ②観仏下本22オ—長永夜乎(上上) ナカナカシヨ(上上) ⑦十一 2802

(4) コト〔事・言〕—コトゴトク〔悉]

事コト(上上) ④高42ウ、言コト(上上) ④図70—悉コト(上上) ④図28、都コト(上上)、クニ(上上) ④図98

これについては、山口氏⑨に指摘がある。

(5) アラシ〔荒・粗〕—アラアラ〔略]

硬アラシ(上上) ②図66、鹿アラシ(上上) ②観法下56ウ—略アラ(上上) ②高103ウ、略アラ(上上) ②観仏中55オ

(6) ツラ〔連〕—ツラツラ〔情]

列ツラ(上上) ②観僧上48ウ、列ツラ(上上) ②雄略訓前—細ツラ(上上) ④図28、情ツラ(上上) ②高12オ

(7) ホノ—〔仄〕—ホノボノ〔仄々)

髻ホノメク(上上) ②観仏下本20オ、風聞ホノキ(上上) ②上49オ—ほのほ(上上) ④訓66・京秘40(上上) ④思40

(8) クル—〔転〕—クルル〔輻輳然]

反転(上上) ④京62ウ、車久留方(上上) ④前三61オ—輻輳然(上上) ④15オ

これまで疊語に対しては、そのアクセント不台を多数形への類推作用で説明するのが一般的であった(柏原氏⑤・田中氏⑦など)と思うが、今回新たに筆者が追加した用例は、いずれも類推説には都合の悪いものばかりである。用例の数から言っても、ここは別の解釈を求めた方が適當であろう。だとすれば、疊語が同語反復によりしばしば強調的意味や感情的要素をこめられることをもとに、強意・強調によってアクセントが変化したと考えることも可能であるように思うが、いかがであろうか。

〔二一五〕 その他

(1) ク〔来〕—キタス〔来〕、キタル〔来]

来ク(上上) ②観僧下42オ、来聚集彼都比(上上) ②神代上訓乾—懐キタス(上上) ④図28、来キタレリ(上上) ②観僧下42オ

これについては、望月氏③・金田一氏④・山口氏⑨に指摘がある。

(2) ヤヤ〔良〕—ヤヤビサシ〔良久]

良ヤ(上上) ④観法下21ウ、稍ヤ(上上) ④観法下8ウ—經久ヤ(上上) ④神代下訓乾

右の二例については、望月氏③・山口氏⑨に指摘がある。この二例に関しては、山口氏⑨の説かれる如く、多数形への類推

作用によるアクセント変化と考えたい。

三、派生語

続いて、派生語における金田一法則の例外を取り上げる。

派生語には種々のものがあり、その取り扱いはなかなか厄介であるが、一応次のように分類してみた。

①音韻変化を伴わない派生、②母音の交替・添加による派生、③接尾語の添加による派生。

あとは、必要に応じてそれぞれ下位分類していくこととする。

以下具体的な指摘に入るが、その前にひとこと付言しておきたい。複合語に比べて派生語の場合は、同源性か別源性かという判定が難しいものであるが、ここでは、さしあたって意味と音韻(狭義)だけをとらえ、同源性の可能性を求めてみることにした。それ故、以下示す用例の中には、別源と見なすべきものが或程度含まれていると思う。あらかじめ注意を促す次第である。

〔三―一〕 音韻変化を伴わない派生

意義分化や品詞の転成による派生がここに含まれる。

(1) コロス〔懲〕、コル〔懲〕―コロス〔殺〕

懲(コロス)〔金平上〕 ⑧観法中49ウ、懲(コロス)〔金平上〕 ⑨下8ウ―誅(コロス)〔金平上〕

⑩図96、許呂佐務苦(金平上) ⑪崇神謡18右

これについては、小松氏⑥・山口氏⑨に指摘がある。

(2) フル〔振〕―フル〔降〕

楓(テヲフル)〔金平上〕 ⑫観仏下本58ウ、甫囉須母(金平上) ⑬欽明謡100右
―土ツチフル〔金平上〕 ⑭図23、雨フル(金平上) ⑮観法下34オ

(3) ヨバフ〔呼〕、ヨブ〔呼〕―ヨバフ〔婚〕

諄(ヨバフ)〔金平上〕 ヨフ(金平上) ⑯図96、呼(ヨバヒ)〔金平上〕 ⑰雄略訓前―嫁(ヨバフ)〔金平上〕
平(金平上) ⑱観仏中12ウ・高59ウ、娉(ヨバフ)〔金平上〕 ⑲上14ウ

右の二例については、山口氏⑨に指摘がある。

(4) カル〔枯・涸〕―カル〔乾〕

涸(カル)〔金平上〕 ⑳図68、枯(カカラヤマ)〔金平上〕 ㉑神代上訓乾―鱒(カレイヒオクル)〔金平上〕 ㉒〇〇 ㉓観僧上58オ、乾(カハラ)〔金平上〕 ㉔30オ

(5) ケヅル〔削〕―ケヅル〔梳〕

刮(ケヅル)〔金平上〕 ㉕観僧上45オ、剃(ケツル)〔金平上〕 ㉖観僧上44ウ―櫛(ケツル)〔金平上〕 ㉗観仏下本59オ、梳(ケツル)〔金平上〕 ㉘十伊六33ウ

(6) サク〔裂〕、トサク〔咲〕

圻(サク)〔金平上〕 ㉙図21、割(サク)〔金平上〕 ㉚鎮三23オ―花(ハナサク)〔金平上〕 ㉛観僧上4オ、左該騰(トサク)〔金平上〕 ㉜孝徳謡14北1・右

(7) ソフ〔添・沿〕―ソフ〔諷・譏〕

添(ソフ)〔金平上〕 ㉝図60、濱(ソフ)〔金平上〕 ㉞図55、そふ(金平上) ㉟源梅―そへ(金平上) ㊱顕府・昆(金平上) ㊲梅、そへうた(金平上) ㊳梅(17)・顕府(20)・寂(17)、譏(ソフ)〔金平上〕 ㊴図85

(8) マリ〔鏡〕、マロ〔丸〕―マリ〔球〕

盃(マリ)〔金平上〕 ㊵観僧中8オ、鉢(マロナリ)〔金平上〕 ㊶観僧上59ウ―鞠(マリ)〔金平上〕 ㊷観僧中39オ、鞠(マリ)〔金平上〕 ㊸前二46オ

これについては、山口氏⑨に指摘がある。

(9) クシ〔串〕―クシ〔櫛〕

櫛(クシ)〔金平上〕 ㊹観僧上38ウ、挿(クシ)〔金平上〕 ㊺神代上注
弘・乾(クシ)〔金平上〕 ㊻観仏下本59オ、櫛(クシ)〔金平上〕 ㊼京六55ウ

(10) チ〔血〕―チ〔乳〕

血(チ)〔金平上〕 ㊽乳(チ)〔金平上〕

血チシ ②観僧中9ウ、血知シ ⑨前29オー乳智シ ⑨前28オ、石鐘乳伊シ乃達シ ①平平 ②図14、乳牛ナウシ ①平平 ③観仏下末2オ

(11) オモシ (重) — オモシ (鉦)

重オモシシ ①上上 ②観法下22ウ、重達毛久シ ①上上 ③1オー鉦オモシシ ①平平

平) ②観僧上60オ、権波加判乃於毛シ ①上平 ②平平 ③京六54オ

(12) ヌル (揺) — ヌル (緩)

汰ユルシ ①上上 ②観法上5ウ・鎮II4ウー慢ユルシシ ①平平 ③図26、謝ユルス

④金平 ⑤図98、慢曲曲比告シ ①平平 ③図26

派生したといっても両者は同音であるから、紛れを避けるために、むしろ積極的にアクセント変化を生ぜしめたと考えられる。その結果が、たまたま金田一法則の例外となつてあらわれたものである。(9)・(10)については、別源と見なした方が良かったかも知れない。

(三十一) 母音の交替・添加による派生

A、母音交替

(1) イタ (甚)、イタシ (甚) — イト (最)

異哆儼介慶シ ①平平 ②允恭語71図、烈イタシシ ①平平 ③図26—純イトシ ①平平

④図26、最イトシ ①上上 ⑤雄略訓前

(2) クラシ (暗)、クル (暮) — クロシ (黒)、クリ (涅)

暗クラシシ ①上上 ②高96オ、陰クルシ ①上上 ③図26—黒クRonシ ①平平 ④観仏下

末28オ、黠クロムシ ①平平 ②観仏下末29ウ、涅久利シ ①上上 ③図25

(3) シルシ (著)、シル (知) — シロン (白)、シラー (白)

旨屢俱シ ①上上 ②齐明語116北1、識シルシ ①上上 ③図73—素シロンシ ①平平 ④

⑤図26、真珠之良太麻シ ①平平 ②図16、精シラクシ ①平平 ③観法下16オ

右の二例については、金田一氏④・山口氏⑤に指摘がある。

(4) アカシ (明・赤)、アク (明) — アキラム (明)

緹縵阿加シ ①上上 ②図26、晨アケヌシ ①上上 ③高93ウー昭アキラムシ ①平平

④観仏中45オ、詳アキラカシ ①平平 ③図90

(5) カク (懸) (下二) — カク (垣) (四)、カキ (垣)

緹加久シ ①上上 ②図26、繫カ、ルシ ①平平 ③図300—智く梅騰謀シ ①上平 ④

武烈語90図、智く農シ ①上上 ⑤武烈語90図・右、垣加威シ ①上上 ③図27

(6) スサブ (荒) (四?) — ササム (遊) (下二)、ササマジ (冷)

荒スサブシ ①上上 ②下118ウ、荒スサヒシ ①上上 ③観僧上5ウーすさめすシ ①平平

④図26、訓・清聞・清声、冷ササシシ ①平平 ③観法上24ウ

意義的・用法的な分化に伴い、その違いを一層明らかに示そうとして、アクセントを転ずるに至つたものであろう。

B、母音添加

(1) (イクフ (射食)、イル (射) — イクハ (的)

射イルシ ①上上 ②上9ウ、弋イルシ ①上上 ③観僧中20ウー的イクスシ ①平平 ④上

16ウ、的イクハシ ①平平 ⑤仁徳訓前、射採以久渡度古路シ ①平平 ③図218

(2) オロク (失意) — オロカ (愚)

无主オロケタリシ ①平平 ②雄略訓前、托オロケタリシ ①平平 ③観仏下本38

ウ、癡駭鉤于機賦シ ①平平 ④神代下注弘・乾・図一駭オロカシ ①上上 ③観

僧中51オ、詳愚イハハリオロカシ ①平平 ②上上 ③図24

(3) (クム (隠)、コム (籠) — クマ (隈)

寄御戸久美止爾シ ①平平 ④神代上訓乾、牢コムシ ①上上 ③観法下33ウー隈ク

マシ ①上上 ⑤図26、隈短爾シ ①上上 ④神代下注弘・乾

これについては、山口氏⑤に指摘がある。

(4) ヌク (抜) — ヌカ (糠)

抜ヌクシ ①上上 ③観仏下本26ウ、疎擢アカリヌケタリシ ①上上 ②上上 ③図26—

用例はいずれも低起式から高起式に転じたものばかりであり、何かしかるべき理由がありそうであるが、その解決は容易ではない。例えば類推では説明がつかないことは、山口氏⑨に説かれる如くなのである。或いはヒログ「展」とヒロム「弘」との比較から、接尾語に積極的・具体的要素を認め、一種の強調ととらえる考え方もありそうであるが、はっきりしない。後考に俟ちたい。

D、ク

(1) ウデ〔腕〕—ウ(ム・イ)ダク〔抱〕

腕ウチ(平)② 観仏中58ウ、腕笑天(金)③ 前131オ—拱イタク(上)④ ⑤ 観仏下本30オ、懐イタク(上)⑥ ムタク(上)⑦ ⑧ 図24

これについては、桜井氏②・山口氏⑨に指摘がある。

(2) アル〔荒〕、アラシ〔荒・粗〕—アラク〔散〕

荒アル(上)② 観僧上5ウ、麁アラシ(上)③ ④ 観法下56ウ—散アラク(金)⑤ ⑥ 観僧中31オ、散歸アラケカヘル(金)⑦ ⑧ ⑨ 観僧中31オ

(3) ユラ〔玲瓏〕—ユラク〔鳴〕

玲瓏曲曲(平)① ② 神代下訓弘・乾、玲く由良(金)③ ④ ⑤ 15オ—喩羅俱慕與(上)⑥ ⑦ 顯宗語85右(上)⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

いずれも、意義分化的要素はあまり認められないようであり、アクセントが合わない理由は不明であると言わざるを得ない。

E、ル・ス

(1) ノブ〔延〕—ノボル〔登〕

延ノブ(金)① ② 高33オ、信クフ(平)③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

これについては、桜井氏②に指摘がある。

(2) カク〔垣〕、カキ〔垣〕—カクス〔隠〕、カクル〔隠〕

寄く農(上)① ② 武烈語90図・右、垣加壁(上)③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(3) スグ〔過〕、スグス〔過〕—スグル〔秀〕

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(4) アザ〔疵〕—アザル〔鱗〕

疵アサ(上)① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(5) イカシ〔敵〕—イカル〔怒〕

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(6) オキ〔沖〕、オク〔奥〕—オクル〔遅〕

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(7) ホシ〔欲〕—ホル〔欲〕、ホス〔欲〕

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

cf. 梅弘報梨(金)① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(7)を除いては、いずれも意義分化的要素の強いものばかりである。これは、逆に言えば、それだけ別源の可能性が高いということでもあるが、同源と認めるならば、アクセント不台の理由は当然そこに求められることになる。⑦については類推によるアクセント変化の可能性が疑われるが、連用形だけ形容詞語幹のアクセントと同じ上昇調を保っている理由が判然としない。

おわりに

以上で、金田一法則の例外について一応の整理を終えたが、紙幅の都合上、用例の提示が中心となり、個々の事情や例外をなす原因についての考察の方は十分におこなうことが出来なかった。これについては、いずれ稿を改めて論じることとしたいが、取り敢えず、今回の作業によって多少なりとも明らかになったことをまとめておく。

(i) 金田一法則の例外は、複合語・派生語の種類を問わず、相当数存在する。とりわけ派生語は著しい。

(ii) 複合語においては、一音節語・畳語の他、形容詞語幹+名詞の構成の語にも注意を払う必要があるであろう。

(iii) 派生語においては、派生法の如何を問わず、動詞の関るものに例外が多い。

(iv) 金田一法則の例外は種々の原因によっておこり得るが、中でも意義分化と類推作用によるものが多いようである。

(v) については、今回の作業によってもその原因を明らかにし得なかったものがまだ多数残っている故、今後の研究の進展によっては、多少変更を迫られるかも知れない。

最後に、本稿での資料の使い方について、いささか申し述べておきたい。筆者は今回、資料として平安期から鎌倉期にわたる種々雑多なアクセント資料を用いながら、それぞれの資料性については、せいぜい加点の正確な資料を優先させる程度で、あまり考慮することとはしなかった。この点に関して甘んじて批判を受けたいと思

う。しかしながら、その危険を冒してもなお、金田一法則の例外とおぼしい例を網羅的に集めておくということは、今後の研究のためにも必要なのではないか、そのように筆者には思われるのである。

注

- 1 ここでは、南北朝以前の、古代アクセントによって支配されていた当時の中央語という意味でこの語を使用する。
- 2 金田一春彦氏「国語アクセント史の研究が何に役立つか」(『金田一博士古稀記念言語・民俗論叢』S 28・5) 28頁。
- 3 本稿では、日本書紀の和語の声点を歌謡(謡)・訓注(注)・その他の本文(文)・傍訓(訓)の四つにそれぞれ分類した。歌謡については、歌謡番号をも記した。
- 4 石塚晴道氏「前田日本書紀院政期点(本文篇補)」(『北海道大学文学部紀要』26、S 52・1)をも参照した。
- 5 桜井茂治氏「西本願寺本万葉集」所載のアクセント表記について(1)「同(2)」(『国学院雑誌』68、S 42・7-8)をも参照した。
- 6 上野和昭氏編「御巫本日本書紀私記声点付和訓索引」(アクセント史資料研究会)をも参照した。
- 7 注2に同じ。
- 8 声点の検索に便であることは勿論であるが、その他鎮国守国神社本の声調の認定なども、影印が見にくいために、実際には同書によったところが少なくなかった。
- 9 阪倉篤義氏「語構成の研究」(S 41・3 角川書店)に詳しい。
- 10 本稿の声点表記において、声調の右傍点は双点(東)は平声軽点、(〇)は声点が差されていないことを、それぞれ示す。
- 11 例えば、次の例がそうである。
キ(牙)ーキバ(牙)
牙キ(金)◎観仏上41オー牙キハ(平)◎高41オ

